扶桑皇統記圖會 一

ハ13
2109
1

2109
1-20

浪華好華堂主人著編
同 柳齋重春先生画圖

扶桑皇統記圖會 前編 全六冊

浪華書肆 岡田羣玉堂
岡田群鳳堂

萬跡

扶桑皇統記圖會叙

古へより世々の帝、史官を朝庭より置き給ひ、君臣の得失及び治亂興亡をいふと更なり、遠き國ふ住む人々の吉凶妖怪奇事怪談云々の人々、世々の刻々、後の世に傳ふる故人の邦

とりわけ法華経を十載に書写したまふ。
孔子春秋を作りて乱臣賊子懼れたり。
實ふきぶとぞうの書つくりたまふ。以降
開成御代の故事なり。聚き吉凶に
ふれゆくに、おのおのの顧ひ知るべきなり。
有ざかりめぐりてふ山田好華堂印墨亭
摂津国浪華にて編集す文の道は

好き嫌ふ傾乃書にも如何ともなく
清濁に心ふ紀憶つ折ふ時ふ時ふ尚ぐ
の物語を綴りて推き児学を導くの
階梯せふ為しふ学て生涯を終さ
めと好りもの。然ふて這間思ひ
てのみて本朝 天武の聖代より
賢君名臣の二言行乃び孝子順孫の事

蹟をあらはす武ひとり好和侵悪のたぐひ烈
節操を婦人の傳その後人に勝れり
いと珍らかなる話説ゆゑ世に連綴て微細か
にこれを記して皇統紀図会とこれを當時の事
實に於ては國史にあまたなるべし婦女見聞
見聞ふたたび野史に世に伝ふ
採るべき山家の児童婦女に汲む海士富女

もとより其 聊代ものの雖ども 大義
憲のおよぼす所あるべきその仇
勲を蒙ふ除き捨まも顧みるべ
けがきはあるべけ
二十階嘉水己酉冬十月己巳
江都
木亭金水謹識

贊曰

道德全者
鬼神不得
而窺矣
役君神異
可謂不測
者焉

前鬼
後鬼

役の小角

地
出
醴泉
是順之
實斯人

孝順

皇上盍恤呈彼禨
祥致此祿秩辭在
易象天祐之吉

孝子
佐久

贊曰

遊唐國才爽敵
相本朝踰貴賊
宮掖兇穢斯條
齊狄梁公奇績

仲麿亡靈

前右大臣吉備眞備

孝謙天皇

帝諱阿閉又曰
高野 聖武之
御子母皇
后不比等
之女也壁
藤原
仲麿
及
道鏡
雖有姦行之譏
詔令天下家
藏孝經一本明孝道
斯可觀

弓削道鏡

帝改元して
弘仁弗融後
有九而為左
宰員外帥
天平宝字八年
復官
横佩豊成公
松ぐ

如法女歟
勝大丈夫
父為所謂
祝髮入無
性無世
樂
乙伝淳図
化尤一偈
不知迦誕
中將姫

扶桑皇統記圖會前編上卷總標目

第一卷

天武天皇御治世　從對馬國始献銀條
持統天皇御即位　大津皇子隱謀自殺事
草壁王の御所ゟ水田江守忍び入ほの圖
持統天皇御即位并御詠歌御讓位條
文武天皇御即位　役行者流罪神変條
役行者開基大嶺　得前生剣杵事
官吏討手ゟ向ふ行者雲中飛行の圖
釋道照与龍神鐺　入宋火葬盥觴の條
日本追儺起源　文武天皇崩御の事
元明天皇御即位　從武州國献始銅條
平城都遷幸　山城國稲荷勸請の事
元正天皇御即位　從近江献灵亀條

扶桑皇統記圖會前編卷之壹目録

天武天皇御治世　從對州國始献銀條
持統天皇御即位　大津皇子隱謀自殺事
草壁王の御所ゟ水田江守忍び入ほ圖
持統天皇御即位并御詠歌御讓位條
文武天皇御即位　役行者流罪神変條
役行者開基大嶺　得前世剣杵事
官吏討手ゟむかふの行者雲中飛行の圖

釋道照与龍神鎗
日本追儺起源
元明天皇御即位
平城都遷幸
元正天皇御即位
金烏王兎集と得ん為仲麿入唐の詔の圖
安陪仲麿入唐
入寂火葬盥觴の條
文武天皇山崩御
從武藏國献始銅條
山城國稲荷勸請の支
從近江國献灸亀條
安倍好根奸計の條

目録終

金烏王兎集と得ん為仲麿入唐の詔の圖
安陪仲麿入唐　安部好根奸計之條

第二卷

養老滝涌出
孝子養老の滝と汲むの圖
仲麿留学于唐上
安禄山等小欺して仲麿樓上小餓死する圖
聖武天皇御受禪
満月九母の仇安倍好根を討圖
満月九呈吉備公血書
吉備大臣入唐
吉備公鴻臚館仲麿が灵ふあ〻圖
唐帝与群臣評議
吉備大臣与玄東圍碁
仲麿妻貞死之條
於高樓餓死詠歌の事
満月九主從討好根條
江南子母錢の事
仲麿灵鬼于吉備公語旧怨條
玄東妻諫良人條
隆昌女隱黑石吉備公仁恕事

吉備公与玄東棋を聞こゆる圖

第三巻

吉備公讀野馬臺の詩を讀む圖

和劫初瀬観音由来

安禄山謀害吉備公

近江の湖水へ灵木流れ来はの圖

隆昌女恩に因て吉備公を救ふ圖

王津島明神勸請

長屋王讒死

大伴小実乞丐成て漆部君足を討圖

聖武帝光明子宮御幸

舎人親王薨去

僧玄昉乱宮内廣嗣謀叛

長谷観音利益の條

佛坐巌出現事

仲麿灵救吉備公危急條

衣通姫人麿傳

大伴小実報主仇事

吉備大臣与廣成等帰朝

始痘瘡流行事

廣嗣憤灵殺玄昉條

玄昉筑紫に至て廣嗣が灵に命を隕す圖

第四巻

鋳大佛銅像

良辨僧正の傳

良辨僧正幼と記大鷲に攫るる圖

近劫石山寺建立

従奥劫始献黄金條

石山に良辨釣をする圖

聖武天皇崩御

恵美押勝誇君寵事

押勝君の寵に誇て百官有司を謾る圖

感世多想大石儲浴湯

改鋳新銭條

弓削道鏡朝恩に蒙て禮讓を廢する圖

弓削道鏡乱宮中

恵美押勝成敗の事

新帝次路に於て謫所崩

神灵路上に[illegible]事

道鏡の内命を受て清麿を害せんとす暴に雷発する圖

光仁天皇御即位

道鏡於配所餓死條

第五卷 上下有

五ノ上
横佩大臣初瀬祈子 中將姫誕生々立條
右大臣東園の桃を愛し花の宴の圖
豐成迎後妻 繼母好計設中將姫條
繼母毒計害却實子 再度好計中將姫陷巧事
繼子を殺さんとして却て實子を毒殺せるの圖
五ノ下
松井嘉兵太与國岡謀義 將監苦忠助中將姫
嘉兵太中將姫ゞ讀經を聽て善心ふかる圖
横佩大臣狩獵雲雀山 豐成於山中遇中將姫條
豐成公雲雀山小狩して中將姫小遭ふの圖
中將姫於當麻寺得道 感得蓮曼荼羅條
繼母の怨灵毒蛇となる姫の化度ふかり成佛せる圖

通計六十二條總目録畢

扶桑皇統記圖會前編巻之壹

浪華 好華堂野亭参考

天武天皇御治世

従對馬國始献銀條

夫世界萬國君有ざる事なし。各政道を建民を治とりくゞも。數其命を革む就中震旦聖賢禮樂の国と称もれども。其王の子孫永世相續とる事能ず周八百年小して亡び。漢八百年小して其統絶とり。其より後世小及でゞ益簒奪相嗣。奥慶極りなし。唯吾大日本の皇國ゝ萬邦小勝れたる神代小 天照皇太神業を創め統と垂りしより人皇小及ても連綿として正統と革ずして支なし。実小万代不易の君子國と申ぞ。然ども國小治乱ある人小疾病有ごゝ。皇國とゝ雖も猶治乱無ゝ能ぞ。抑人皇四十代の聖王天武天皇と申奉る人先帝天智天皇の御弟ふ

始の御名と大海人王とやなす。天性聰明叡智ふまし〳〵。神明を敬ひ佛法を
ゝるゝと文を重んじ武を好ませのひられで。天智帝も天下を治め給ふと知食
皇子大友皇子とさゝやれて御弟大海人王と皇太子ふ定めひる。然ふ大友
皇子ハ是を嫌ひ佞臣ふの勸ふ任せ御自己の望を起され。叔父大海人親
王を弑害せんと企のひしふ親王其機を察し。疾も吉野へ入せのひて其難を
避のひ潛ふ緒皇子と倶ふ東國へ下向まし〳〵。軍勢を召募て都へ攻上りのひ
大友皇子と御一戰あるゝふ。聖運芽出度京軍戰へ毎ふ敗績し。終ふ粟津
乃戰ひふ大友皇子躯劍ふ伏て亡びのひられば親王群臣の乞ふ任せ人皇四十代
の宝祚ふ登のひ阿閉皇女（後ふ地天皇と号ゝ）皇后と。皇子草壁皇子を春宮ふ
立のひ給ふ。後ハ四海天皇の聖德ふ仰ぎ万民太平を颯ひ給ふ。独九州豊
後の大伴真鳥の〻已が逆威を逞ましゝ。われけなゝも天位を簒奪せんを隱

謀と企られども是文官軍を差向られ一戰ふ真鳥を伐亡し。兵乱頓ふ鎮ま
り〻ぬ。君宸襟を安んじのひ倍仁政を四海ふ布給しの〻是ふ依て八
嶋の外まで能治り靡ぬ艸木もなく戸ざゝぬ御代となり。異邦の三韓より
も貢物を献りて御即位を賀し奉る。
感じのひん白鳳三年三月對馬國より始て銀を献じ奉る。是日本ふ白銀
を産する始なり。天皇御感浅ゝず。對馬國司大國を小錦下位ふ任じ
給ふの緑を賜り。献る処の銀ハ緒社の神祇ふ捧しめ給ふ。同三年始て六月祓を
行ひる。是夏越祓の起源なり。又此御宇ふ踏歌の儀會始り五節の舞し
給ふ。大嘗會の悠紀殿主基殿も此帝より始のひ皆末代まで朝家の
恒例となれり。其外緒社の祭も此御代より始る者多く。朝廷の法度も品〻
多く定られる。天皇猶も天下安全の祈の為ふとて江州坂本の郷ふ大堂ハ

社を建。曰岡矢槁の浦ゝ八幡宮の社と建。和州吉野下市の山中ゝ丹生の社と
建。岡女神像曰岡平郡の郷ゝ立田の社紀天御柱神國御柱神 又建曰岡廣瀬ゝ廣瀬の社
賣神と建。又佛法を崇ゝ山城國乙郡郡八坂ゝ五重の大塔を建立。
丹後國ゝ成相寺と建立。其余建立の寺院多。白鳳十三年四月
文武の百官を召て紀。八凡政の要八軍事なり。茲ゝ近年武官の輩逸樂
ゝ耽りて武備を忘れぬるの聞えあり甚ゝ以て宜ゝ以後ゝ武備ゝ怠る者八
親疎の差別なく其職を作け。武吏ゝ猜る者八卑賤なりとも撰出して官を授け
しむべしと勅。ゝ武官の輩大ゝ恐入是より皆兵馬の道を励ゝ。又
帝八種の尸を定。一曰真人。二曰朝臣。三曰宿禰。四曰忌寸。五曰道師
六曰臣。七曰連。八曰稲置。坂上なり尤是すで採ゝ載れども今度改めて
等を定めの所なり。偖又新禮を定めて諸臣ゝ黒漆の冠を著せしめ朝服乃

色をも定めの。浄位以上八紅華。正位八深紫。直位八浅紫。勤位八深緑。務位八
浅緑。追位八深蒲萄色。進位八浅蒲萄色等なり。十五年正月大和國より赤
き雉子を献ず。是ゝ因て公卿皆太平の祥瑞なりと慶賀しなりゝ。帝
大ゝ御悦ありゝ。年号を改め朱鳥元年とし。天下ゝ大赦を行ひ諸の罪囚を
免し放さしめの。茲ゝ日年六月ゝ天皇御悩ゝ深のひ。されど春宮女御八中及
び諸皇子公卿も大ゝ驚き医官ゝ委て良劑を奉しめ。ゝ。諸卿評
議して曰。先年妖僧道智。真鳥ゝ頼ゝ應ず。熱田の神宝草薙の御剣を奪
去んとせしを大伴金道彼僧を虜ゝ。宝剣を禁廷へ上ゝ。今ゝ以て大
内ゝ留め置の。ゝ。熱田明神是を咎の。崇ゝ。やはて。帝へ此義を奏し州
薙の御剣を熱田の社へ返し納めゝ。熱田の大宮司大ゝ怡び先年の賊難ゝ手憶
して深く神庫ゝ納すり周く鍵を封ぢて守護しゝ

持統天皇御即位　大津皇子隱謀自殺事

宮劍熱田へ入御まして後、帝の御悩少し忘せ給へ体ふんえさせ給へ共、
子皇后を首とし、満朝の人々と頼母しく思ひ怡び給ふ。八月の末より又重させ
給ひ医官の良方寺社の加持祈禱も其験なく奏せざる。九月の首頃より御悩頻
ふ逼せ給ひ給ひ帝も今は斯よと思食皇后を御枕頭ふ招ぜ給ひ朕先帝
の詔命を奉りて帝位を嗣菲薄の德を以て紫宮の尊位ふ安居たる吏十
五年常ふ戦々兢々として万機の政務過ち多し人吏を恐れき。茲ふ今をでふ
天數尽て九泉ふ赴んとす。太子はいまだ年若して朝政を委ぜ難し。依て即身皆王
位を嗣ぐ政務を執臣下を掖育し直を挙曲を伐て万民を子の如く恤む貴ハ
重く罰ハ軽く。世殘安寧ふ治め勢く怠りなふ吏おられと。御遺勅あるく
終ふ朱鳥元年九月中旬飛鳥宮ふて崩御なり給ひ御在位十五年宮

筭六十五歳にて皇后太子諸皇子月卿雲客諸司ふいたる迄深き
悲歎ふ沈み給ふ。斯て有果ぬれば尊骸を収め奉り御送葬の儀
式を調へ大和国高市郡檜隈の大内の陵ふ葬り奉り給ふ。斯て満朝の皇子群
臣綸閣ふ竜り給ふ天下一日も君無んで叶はざるとて御遺勅ふ任せ皇后を四
十一代の帝位ふ即奉る。持統天皇と申ハ此君なり。御諱ハ高天原廣野姫天
智天皇第二の皇女ふて在せり。茲ども綸閣の中なれど御即位の大禮ハ執行れ
ざ仮ふ政を預給ふ。此君ハ女儀ふ在ら智才衆ふ勝れ御心雄々
しく壬申の兵乱ふ先帝ふ従ひ東国へ下り給ひ軍中の吏を撫し給ふ。
乱治りて天武帝御即位在し後も政を常ふ輔け給ふ故ふ先
帝宮祚を嗣ぐ。御遺勅有しを茲ども此君敢て帝位を辞
ぜず綸閣の畢を待て春宮草壁親王ふ登極を勧んと思食給ふ

忽ちに起動出来り。其根を尋ぬるに。草壁親王の別腹の御子に
大津皇子とて世に聞こえ。天性才智秀でゝ。幼年より学問を好ませ給ひ
成長に順ひ学業進み博識の世に高く。壬申の乱に亡びぬ。大友の皇
子とも御学友にて。文を屬し詩を作る。夷大友皇子に劣らぬ加之
武力普通の者より強く。馬術に達し弓矢に物取ても歴々の武士に勝
れたり。先帝も深く其才芸を愛し給ひ。御世嗣の太子にもと
思召れども。草壁皇子は兄とは后腹に生れ給へば。大津皇子を太子に立
度叶はせ給ざる。草壁皇子を太子と定め給ひ。大津皇子は文帝の御寵愛深き
故に。内心に我こそ太子に立らるべきと空頼して居給へ。草壁皇子は立太子
の宣旨下りしなば。大に望を失ひ内心不平の思を懐れ給へ時も其頃行
心とて僧あり。元は新羅國の産にて博学なる上天文に達せり。
諸人渠を重んじ。大津皇子も思召所すまに平日に行心を招て道親
く待遇の對人にかなへる人事に觸て世を怨る色とあらはれる程行心早
く皇子の意中に王位の望ある事を推量り。皇子に密に曰る。君は御
相貌を見奉るに。大に貴き御相おわす。更に人臣の相にあらず。然に今臣下の
列に加りの人恐くは天の配する所に背き。若人臣に下り春秋を送り
御短命に或不虞の禍を蒙り。天寿を害ひ給ふ事。是天の配する
所に背き故なり。先帝は聖智の君にて在せしと承るに。流石相法に
疎くましく。君と春宮に立給ひ。柔弱の病の草壁皇子と太子に立給ひ
そ恐ぬる。智者の一失に御一生の御過なりと。飽まで侵奉てふるひく阿諛れ
ざる。船を時に登極の望を。大津皇子行心が注語とやらん
て大に心動て声を低て仰るは実に先考九と世嗣の位に立んとの虞慮に

すれども。后腹とりひ兄なれバ。群臣の奏とるふ任せ。忡壁皇子ふ世嗣の宣旨と
下しゐひ。敢又帝の御綵あらず。唯丸ゞ不運とゝ。ゆ。のこと仰ふ
ど行心腸を進め。ゆ。で何ど大事と思ふ。ゆ。今先帝崩御ゆ。后
仮ふ政と関りゆ。ども御即位あるゝと中ふ。ゆ。願てゆ。時なり。此時
と失ひゆ。ひゆ。帝位定り後悔脇と噛ゆ。ふとも其甲斐いまゞと只出る仇
あゞろげゆ。ぬ隠謀と勧め進せる。憶利口の邦家と覆すとハ是等乃
吏と紲なるべし。大津皇子ハ行心ゞ佞言ふ愈不良の御心募り。実ゆと思
召是より行心ゞゆ。腹心の家臣と集めて隠謀乃密談をなし。人ゆ。ど忡
壁親王と害せんと。水田江守とて忍びの名人ふ密糾を言ふ含られ。ゆ。江守
素り武術鍛煉の鳴呼の者ゆ。皇子の命ふ従ひ暗夜潜ふ忡壁皇子乃
御所へ忍び行。大膳ゆ。も堀と兼起。兼て案内ハ知つ。地ふ抜足して御寝殿乃

坪の内ふ入身と潜て窺ひるるふ。忡壁親王の鷹鳥犬ふ猛丸と号られし御愛犬
江守と見て怪ゝ咎め。忍ち吠ゝと吼て進ゝよりるるふゞ。江守ゆ。て者あれバ
太刀と抜手ゆ。んせど。飛ゝ犬の首と水も溜ど裂止と歩落し。るふ其首
吠ゝ。ゆ。て江守ゞ太刀持ゝ。ゆ。二の腕ふ岸破と咬付ゝ。江守大ふ孩丸急ふ捜
ア捨んとゆ。れども。強く噛付られバ。敢て離ど。痛ゝ骨ふ徹て堪ゞ。左右して
岡著ゆ。る内親王の直宿の近習ふ猛丸ゞ平日ふ変りて啼吠ゆ。怒ゆ。ゝ
盗賊なんどの潜入ふやと。四五人手燭と燈し。爰彼所と見廻ゞるふ。坪内ハ怪き
曲者覆面せゝ。脛ふ噛付ゝ。犬の首と引絞んと。て居ゞると。丸付大いハ
孩丸須鷲ゝて皆一度ふゝ。忍ち捕られバ。犬の首ハ。ゆ。れと離さ。ハ
落ゝ。近習ふ江守と取巻何者ゆ。と。覆面をとり燭とさし付面体と
ゝ。ど。認ある大津皇子の家士ゆ。れど。甚ゞ不審何の為此御所ハ忍入ゝ。ど百

水田江守
仲壁王の御所へ忍びて江守の頸を一斬る

般ホ糺問ーれども一言も白狀せざりれば曳て武士の手へ引ー骨と迄で拷問させれば、ーとの江字も苦痛ホ堪ずして遂ホ大津皇子の御類ホ坪壁親王と弑ーまん爲忍入ー由て白狀ーるるホ皆うち驚れ其上大子へ言上ーる。坪壁親王も以の外驚せの御兄弟の御吏ホ望ま内らぬ大吏カ心ホ先曲者厳ー禁獄させ御參内ありて大津皇子ホ謀反企ちる由奏聞ホ及ばれ皇后も御殺害方ホ成ず時の執政高市王ホ此義如何と問ホ高市王も御兄弟の吏ホ狂ーるる大罪ホ成れさー置ばホ成ず。先ー召寄て実否と糺問ーと奏ーホ依て即時ホ有司の廳へ大津皇子と召捕きるべーと命ーホ依て有司の武士大津皇子の館と取囲ー朝廷より御不審の條有て急ホ召ー由申入れば皇子ホ早ホ大ホ驚れ偖ハ刺客の密謀早ホ露顕せーホ矢内ー

辱と蒙ーんよりそ船刃ホ伏ー死ーのれ。后妃山邊皇女も同ー刃り貫れ殉死ホ及ひ程ホ館の騒動ホ日ー夜の局女房達ハ泣叫び男子の輩ハ館へ火ホ付ん征兵と紛れと紛議區ーホて一決せず云甲斐ホ成れ族ハ身と遁ホんと周章ーる。有司の武士ホ皇子御夫婦已ホ自害ホ及ホ至て打驚き館へ入ー近習外様の士下部ホ迄尽ー捕有司の廳へ曳ー。高市王大津皇子御夫婦自殺ーるーホ依て御内の者ー残ず捕ゆと言上ーれば高市王即ち召捕ー皇子の近習ホ糺明させらー皆彼僧行心ー謀叛と勧めせー白狀ーる。依て緒方と呼ばせて遂ホ行心ホ捕縛ホ厳ー跨問させらるホ始ホ及ばれども呵責度ホ堪ず遂ホ明白ホ白狀せー更行心及び隠謀ホ荷擔せー武士水田江字と倶ホ捉ホ九人死刑ホ行れ其余の者ハ御咎カ男女とも追放ーとー一件落着ホ

愚なる大津皇子眼前に大友皇子を亡ぼすを見ること前車の覆るに
紙を忘れ妖僧の妄言に惑ひ。多く隠謀を企て非命の死となり不良の
悪名を残すのみ。吏自才伎特での御過ぐし惜るべし。御吏たり。
持統天皇御即位元年御歌御繍位條
皇后万機の政を関りのみ。高市王と万事御商議有て三綱五常の
道を正し普く天下に仁政を布給へり。鰥寡孤独の窮民に米粟を賜ひ
貪を憐み老弱恤むのみ。其仁徳異國にまさり隠なし。二年の春新羅の
聘使来朝して數多の貢物を献じ。泰平を賀し奉りしに皇后御繍の
あるを使者に重く饗應し種々の出物を賜りて帰國せしめ。此正月に
始て御杖を献ぜし是卯杖の權輿なり。又女の化粧に白粉を用ひる事も此御宇より
始りし。時に其年の七月大に旱魃して青稲炎暑の為に枯凋農民困
困し其年八基ぶ稔薄し。これ皇后大に憂ひ是我不徳のなす所
として其年八民の年貢を半減して納むべしと觸させられぬ。天下の
農民大に悦び感涙を流して都の方を拜せぬ人なし。斯て三年の夏の頃
春宮卿壁皇子御不例にてうせ給ひ。医薬功を奏せず終に四月下旬に
薨じ給ひ。御寿二十八才なり。皇后ぶめ群臣大に歎き惜まれぬ。甲斐
なれば御送葬の禮を重くして荒殯をなる。四年正月猪卿経議あって皇
太子薨去し給ひて日嗣の君すまずして皇后に御即位を強て勧めまゐる
皇已度と得給ぬ。遂に宝位に即給ひ大禮式執行せ給ひ。これ公卿百官の
臣下大に欣び拜賀して万歳と唱る。天皇も御満足まして天下に
行ひ給ひ。民の八十才以上の老人に米粟を賜る。借高市王を太上大臣に任
朝政を執せ給ひ。其後天皇群臣を召れて雅に太子に立ぶべしと勅

緒臣下各其身の所縁ある皇子方を勸て評議更に一ぢろ所に竟野
王とり〻人位階を進め出列位の勸やまる〻所皆倫に非ず現に先太子の
御子珂璃王在せり是〻て王家の御正統なり此君をさ〻置余の皇子を
太子に勸らるゝハ嫡を棄庶を取の僻論なり最天智天皇御子の大友皇子
とき〻ハ御弟天武天皇に立太子の宣旨を下し給ひハ大友皇子の天下を治め給
ひ器にあ〻ざるを知食賢を挙不肖を捨給ひ聖智にて常例を去り歴代本
式定むるハ嫡庶の分を明にするより善なり理非を正してやまれぬ天皇
史食て葛野王の論を理に合りと賞し給ひ高市王も確論なりとやさるゝに
依て遂に一決して珂璃王を太子に定め給ひる斯て朝廷の群臣に俸禄を
増加給ひ皇女を是より内親王と称を賜へり詔あり又命婦に位を
授け女官の位に進等の変も此御守より始め給ひる月八年に高市

宮造なし給ひて御遷都あり是を藤原の宮と号す天皇ある時夏の
ちゞめ樓より十市郡なる香具山を遥に白れ衣服を著て乾り
あれハ何ぞと女官に問せ給ふ今夏の首に彼山の辺の賤の家に更衣
せんとて衣服を干侍るなりと上られば天皇奥じ給ひて

春もすぎて夏ハきぬらし白妙の衣ほすてふ天の香具山

と御製あそばしける此御歌万葉集に入やすと古今集にも入られ古今に
も中〻紛違へる不審のよし人もあれど猶尋ぬれば去程に春と夏
秋と暮る〻珂璃太子早十六才になせ給ひ天性温順果和にして又御
秀才にて博く和漢の書典に通し神と敬ひ佛と尊ぶ給ひ明君にて世
の人ゝ天皇御欣悦ありて太子に宝位を譲り給ひ御即位の
大禮厳重に執行ひ給ふ是に依て百官百司拜賀して万歳を唱へけ

文武天皇御即位　役行者流罪神変條

珂璃太子已に四十二代の帝位に即せり。是れ文武天皇と申す御諱矢
之直宗豊御父草壁皇子御母は天智帝の皇女なり。持統天皇の御孫に
てまします。さて天皇殊更に鍾愛の御。藤原淡海公の女宮子媛と申す其頃
天下に雙なき美人の宮え有れば則ち入内させ給ひて皇后に立ち給ひ。帝朱
ご御若年なれども智徳兼備し給ふ明君なる上高市王是を補佐し奉りて
專ら四海に仁政を施し給ふが故八嶋の果までも浪風穏ごと。万民腹鼓を拍く
太平とぞ謳ひ奉る。帝先帝持統に太上天皇の尊号を奉り給ふ。吾朝太上天皇
乃始なり。時に文武天皇御即位二年の夏大に旱し。五穀枯れ泉も川
も水涸れむ万民大に困窮し奉る。帝是を憂ひ歎させ給ひ朕不肖の身を
以て十善の帝位を汚す事。天神地祇の咎めなるべし。史記にも夏禹王

乃世に大に旱魃せしが。禹王自ら雨を祈んと。薪を積で祈雨の檀を造り。其上に
登りて天に向ひ自ら罪を負ひ若雨を下し給へ。己が所に焼死せんとて。己が
薪に火をけたれば忽ち天雨降て赤土を潤し民の患ひを救ひ給ひしとぞ
朕是に倣ひ身の罪を負ひ雨を祈んと。紀の禁廷の太庭に檀を設け
天皇沐浴斎戒なし給ひ。浄衣を著て檀に登り給ひ。焼ぐ如き炎日に照蒸れ
給ひ。一心不乱に雨を祈せ給ひ。雖有き。是に依て公卿百官も。檀下の四方乃大地
に平伏く。倶に雨ごと祈り奉る。斯て帝。祈誓の使三日に及びて。高天も
聖徳に感納し給ひ。三日の申刻過より忽ち密雲四方の山々より起て
一天に充ち。地に沛然として大雨盆を傾るが如く降出し来るに。帝大に悦び
せ給ひ。天地四方に拜し給ひて檀を下り宮中に入御なし給ふ。三公九卿及び百
司百官雀躍して万歳を唱へ。勇悦て限なし。去程に膏雨降て三日三夜

降通じ枯れ枯れる稲青くとなり其余田畠の作物萎物旧ふるに池泉
川くも水充満しるるゆゑ。緒國の人民大いに怡び是吾大君の御恤なり斯
甘露ふ等れ雨降。我往乃飢渇を救ひ給へと。帝德を感拜し勇
踊らざる者なしなり。其年の秋は五穀とも稔多く万民大いに富み全く
帝の御德による処なり。月三年役の小角と云る有髪の驗者を伊豆國流刑
ゆなされる。抑役小角とは大和國葛城上の郡茅原郷の産にて父を
役公氏と呼り人皇三十五代舒明天皇五年癸巳三月役公氏の妻天より乃
独股杵降て口に入と夢み懐妊し。十月を経て日六年甲午の春正月元日に
一男子を生り。面貌異相にして形躰魁悟に頗る尋常の赤子と異なり。名
を小角と号て言るに幼少の時より自余の小児と游戯を好まず。只山林に
入て独游る。十三才に及ぶ頃維に学ともなく密乗を感悟し。能孔雀明王
の咒不動の真言を持誦し。雨中に笠を被ざれども衣服を沾さず。常に行
歩するに足跡を履て蟲虫を踏ざる。藤を編て衣とし。菓を食として佛
道を煉修し。十七才にて河州金剛山に登り修行しるに。日澗に微妙の声
あるを聞て。渓を下るに不期法起菩薩に拜謁し。菩薩の説法を聽聞
して三昧を裝得し。山上に一宇の草堂を建て。法起菩薩の尊像を刻
安置し。金剛山に住ること凡十年。齊明天皇四年戊午。小角二十五才に及び
金剛山を出て摂州に行り。三月十七日箕面山に登り澗の流に沿て山深く分入
尋行に三重の瀧あり。最上の瀧は高さ二十一丈是雄瀧なり。第二瓔珞乃
瀧に岸石飛泉玉を串るごとく。因て瓔珞の瀧と号く。第三は嵯峨
なり。高さ十五丈余。宛も布を曝せるが如し。頂上の瀧壺に龍神住り其体七三
丈折く黒雲を吐て雨を降せり。瀧に雨を祈るに必ず験あり。小角此瀧壺の邊

ホ茆菴と結び栖で丹臧を凝して苦行するホ月年四月十七日の夜の夢ホ心ホ
滝壺の底と探知ばやと思ひ淵の中へ飛入底深くいれど却く水なく一座の城
廓有て石門と鎖しるホ角ホ何人の栖ホやと時停立て内の動静をゆホ
坐ホ技樂の韻ホ聞ふ依て不動の真言を誦する吏數百遍ホ和ゴ頃恐ち
門内ホ声あつて向て白門外ホ真言を誦する人維人ぞやと小角答て我ハ葛城の役
の小角なり。幾ひ人を維ぞ。門内より答て。我ハ是德善大王なりとて即門を開て
小角を請ド入奥へ伴ひ行ホ。重門高く樓閣豊とな多檐と聯るり。悉く七宝と
鏤て荘厳し。金の堂珠の楷心も紛も及ばぬ。宝池ホハ優盌羅華。拘物頭
華咲ちて妙香馥郁と芳ア。琪樹列ア異州生。亞含和雅の音を奏して
妙法を囀リ。宝幢幡蓋薫風ホ飄リ。摩尼の燈明ホ閃爍と光ア甘露
醍醐の飯食寶器ホ盛陳る。偖殿前ホ一丈餘の錫杖と立。正面毎ホ丈余
の皷磬と懸る。皆剋限到ま已ば揮撃ざれども已と微妙の音を奏す殿
中ホハ龍猛菩薩坐しの左右ホ十五位の金剛童子囲繞せり。又中央の宮
殿の裡ホ七宝荘厳の床あり。其上ホ龍樹菩薩辨才天女侍立して坐
しの人ア時ホ德善大王佛前の香水を執てホ角の頂ホ灑ぎ。頂を撫て曰ふ
本所ホ還リカの及ぶ限意ホ任せ。難山切所を開ク佛場と成ると有ラれば
小角撻人で領掌し九拜して退ク出水上へ浮上とホ。愕然として夢さめ
る。ホ角大ホ歓喜しそれより滝の下の西の側なる荊蘚を刈て石を
平げ草の堂を建。等身の我身の丈と龍樹菩薩辨才天女の像を造り
日年十月十七日紅葉を折薪を樵て。両眼供養して安置し又德二十六年十
五の金剛童子等の像も造リ。護法神と堂の東北の隅ホ祠を建て
安置し。毎て畢ハ滝の上ホて孔雀明王の呪を誦し夜滝の下ホて不動の呪

と編山の巻洞の水と供〳〵二時の閼伽懈怠を三度山の観行の神恠を凝し味行
苦修をする事二十年。是功徳に依て於伽羅制多迦の二童子まつて登案
給仕〳〵。又前鬼後鬼と云山神常に事て薪水を挹み。それぞ小角神変奇特
究りなく。能空と歩〳〵水と踏て渉り。人の吉凶禍福を未前に察し。疾病苦
者に咒符を与へる事奇病難病も治せぞと云事なし。是に因て世人小角を活
佛のごとく敬ひ尊ひ神変大菩薩とぞ称しける

役行者開基大嶺　得前生剣杵事

其后天智天皇六年乙卯小角二十四才にして和州大嶺と開祖て動修し多く或
日嶮峻峯に登る〻に一個の骸骨あり五體分散ぞ長九尺五寸余にて左
の手に独股杵を握り。右の手に利劒を持て仰に臥り。其触髏の眼中より樹
木生出る。小角是を見て其劒と杵を取んとすれども更に取事能はず小角